ジーフリトの虚偽行為における
ニーベルンゲンの詩人の詩的創造力

田　中　一　嘉

序　…虚構と虚偽の二重構造

1200年の世紀転換期に成立したとされる中世ドイツ叙事詩『ニーベルンゲンの歌（*Das Nibelungenlied*）』[1]の中心人物のひとりジーフリトは、クリエムヒルトを娶るために「嘘」をつく。さらに、その嘘は別の嘘のよって上塗りされていく。なぜ彼は嘘をついたのか、あるいは嘘をつかねばならなかったのか。本稿の目的は、彼の虚偽行為に潜む動機の構造を解明すること、そして彼の行為が作品の受容者にどのように受け取られたのかを解明すること、すなわち中世当時の宮廷社会における倫理観と照らし合わせて、作中人物ジーフリトの虚偽行為が積極的意味を持ち得るのか、あるいは否定的なものとして理解されるべきものなのかを解明することである。

ただし、ここには、中世文学における「真実・真理」とは何か、という非常に複雑な問題が潜んでいる。この問題を紐解くために、いくつかの段階を経なければならない。まず、文学そのものの在り方、すなわち文学＝虚構に対して同時代的な評価がどのようになされていたのかを概観する。この段階を経るのは、『ニーベルンゲンの歌』の「素材」故である。『ニーベルンゲンの歌』の叙述は神話的・メルヘン的要素が多分に含まれている。このような要素の取り扱いが、どのように詩人によってなされたのか、あるいは（受容者との間に）どのような文学的効果があったのかを明らかにしておく必要がある。その上で、ジーフリトの人物像と動機の構造を分析し、これと並行するかたちで、彼の虚偽行為に対して詩人がどのような姿勢をとっていたのかを考察する。この三つの段階を経ることによって、詩作における虚偽行為の受容のされ方が明らかになるだろう。

1. 虚構に対する中世教養人の姿勢

中世において広義の文学的テクストに数えられるものとして、キリスト教文学、世俗文学（ここでは特に叙事文学）、そして歴史叙述家による「年代記」が挙げられよう。この三者は、「叙述する（erzählen）」という文学的営為、あるいはその営為の結実である「物語（Geschichte）」に関して、一定の共通性を保ちつつも異なるコンセプトを有している。この共通性と差異を明らかにするため

に、古代ローマ時代から12世紀に至るまでの虚構性に関する文芸理論の記述を辿ってみたい。

プルタルコスは、詩学入門書かつ文芸擁護論『どのようにして若者は詩を学ぶべきか（*De Audiendis Poetis*）』（80年頃）の中で、意図的にせよ、そのつもりがないにしても「詩人は多くの偽りを歌う」（16A）と言う[2]。ただし；

> 詩は模倣を基礎とするので、主題となる行為や登場人物に対して文飾や華美な文体を用いるが、他方で模倣の魅力はもっともらしさにあるので、真実との類似性を放棄していないことである。それゆえ、真実を完全には無視しない模倣であれば、（中略）行為には徳と悪徳の両方が混じり合っていることを示す表現を行う。（25B/C）[3]

このような詩文芸に対する評価は、彼より少し前のホラティウスの『詩論』（前18年頃）にも見出され[4]、後にはセビーリャのイシドールス（560年頃-636年）の『語源（*Etymologiae*）』にも継承される[5]。これらの詩学に共通しているのは、「詩人たちは実際に起った物事を記述しているが、しかしその物事を〔歴史家のそれとは〕異なる言語的芸術作品の領域、すなわち詩作の領域において技巧をこらした言語表現によって記述している」[6]という点である。ところが、このような古典後期およびラテン教父時代の理論家たちの詩文芸の自由度に対する比較的好意的・積極的な態度とは対照的に、中世盛期文学時代の物語詩人たちはしばしば自らの詩作において、彼らの手元にある「素材」あるいは「原典」を引き合いに出して、その叙述の真実性・信憑性について「弁明」を述べる[7]。ニーベルンゲンの詩人もまた、詩作を次のように切り出している：「古（いにしえ）の物語（*alte[n] mære*）において私たちに数多の驚くべきことが語られている」（Str. 1, 1）。しかし、このような自らの詩作の「真実性」への担保は、「素材に手を加えることができる」という詩人としての資格を自ら剥奪する、逆説的な自己弁明である。ただし、このような弁明は一種の文学的トポスであって、実際には詩人たちはその詩的創造力を如何なく発揮している。このトポスによって、過去の出来事（素材）と現実の世界（受容者）とが初めて結び付けられるのである。

ところで、中世の詩人にこのような逆説的な状況を引き起こした主たる要因は、当時のキリスト教著作物において、先のプルタルコスの「詩人は嘘をつく」という警告が何よりもまず「異教的な」古代の詩作と「寓話（Fabeln）」に向けられたことに由来する。アウグスティヌスは『告白録』の中で、アエネアスとディドの物語（Geschichte）を「詩的捏造（*poetica figmenta*）」と見做し、この物語は真実でないが故に、人々は何の不利益も被ることなくこれを忘れることができるとしている[8]。一方、キリスト教的文脈において「真実」と見做されるのは、神の啓示と結びつくもの、すなわちキリストの行為、聖人たちの行為、使徒たちの行為であり、それこそが物語られる「歴史」として相応しいとされた。このようなキリスト教的詩学解釈の影響下で、世俗の詩文学において肯定的な意味を持っていた虚構性が、聖書と教会という最高の権威によって（否定的な意味での）異教的な「偽り」と交替してしまった[9]。このキリスト教文学の伝統は、9世紀以来、民衆語の領域

にも影響を及ぼし、『アンノーの歌（*Annolied*）』（11世紀後半）や『皇帝年代記（*Kaiserchronik*）』（12世紀中葉）にその傾向が顕著に見られる。『皇帝年代記』の作者は、ニーベルンゲン伝説あるいはディートリヒ伝説に関する（おそらく『ニーベルンゲンの歌』も含めた）書物（*buoch*）における「事実誤認」を指摘する（V. 14176-14187）[10]。これは、『皇帝年代記』が歴史書の体裁を採ってはいるものの「事実に忠実な歴史的視点からではなく、聖人伝的に構想された」[11]ものであることと表裏一体の関係を成している。

確かに『ニーベルンゲンの歌』は、少なからず歴史的事実を物語の「素材」としているが、そもそも物語における「出来事」はほとんど歴史的事実と一致しない。それ故に、先に述べたような詩人たちの自己弁明は、世俗的な詩作をもっぱら捏造と偽りであると判断するキリスト教文学の厳格な要求の前で、物語の「真実性」を証明するための弁明の試みなのである[12]。彼ら世俗詩人たちの描く真実性は、歴史的事実を保証するものではなく、むしろ同時代的な宮廷的模範性の内にある。例えば、キリスト教神学について教養の高い作家トマジン・フォン・ツィルクレーレは『異国の客人（*Der welsche Gast*）』（1215年頃）において、キリスト教の天啓についての純粋な真実が成人にとっての相応しい読み物であるとしながらも、（宮廷的・世俗的な）道徳的価値を作り出し、それを教示している宮廷物語の模範形は若者が読む物としては妥当であるとして、世俗文学の意義を認めている（V. 1023-1162）[13]。

以上のことを鑑みれば、民族移動期やおそらくそれ以前の歴史的事実が、どのような過程を経て『ニーベルンゲンの歌』における叙述に至ったのかを辿ることは不可能だが、その変容の過程における詩人（作者あるいは語り手）の詩的創造力の介入を否定することはできない。また、『ニーベルンゲンの歌』に見られる神話・伝説的要素は、おそらくその文学的起源を一にする北欧系伝承のそれとかなりの程度相違を示している[14]。「素材史」に関する先行研究の中では、北欧系統の方がより「原典」に近い、あるいはより古い伝承を保持しているに違いないという立場から、そのような作品に描かれていない伝説が中世の読者聴衆の期待として算定されているに違いないという立場が少なからずある[15]。しかし、そのような暗黙の了解としての素材を当時の人々が知り得たという根拠はどこにもない。これはいわば研究史上の「素材の拘束性」とも言えるものであるが、素材を改変すること自体に詩的芸術性が見出されるのではなく、あくまで改変されたその中身が中世の受容者層にとっての「真実」を反映しているか否かによって詩作と詩人の芸術性が判断されるという意味においては、そのような暗黙の了解を当時の受容者の期待の地平に含むことは妥当ではないだろう。むしろ、例えば、H. Schneiderが、伝説を素材とした英雄叙事詩の特徴は「歴史的出来事のドラマ化」にあると見做し[16]、またX. von Ertzdorffも「オリエント、ケルト、ゲルマンの叙述伝統に由来する古代と古典後期の伝承における物語は、12・13世紀の宮廷的アレンジにおいて再び生気を得た」[17]としているように、詩人の素材への介入（当代風改変の痕跡）をより積極的に捉えるべきであろう。

では、ジーフリトのドラマにはどのような「真実」が潜んでいるのだろうか。次いで、ニーベル

ンゲンの詩人が詩作全体に施した中世的・宮廷的装飾について、ジーフリトの行為を中心に分析していく。

2. ジーフリトの人物像

2-1.「王者の不文律」

ニーデルラントの王子ジーフリトは、ブルグントの王女クリエムヒルトへの求婚を決意する（Str. 48ff.）。この決意に先立って描かれているのは、ジーフリトが成人を迎え、刀礼の儀を経て騎士に列せられる場面（Str. 20-43）であるが、この祝宴に訪れた客人や楽人たちへの惜しみない施与や、騎士競技（*bûhurt*）が開催された様は、『ニーベルンゲンの歌』のみならず同時代の宮廷叙事詩にもしばしば見られるものであり、封建的宮廷社会の祝宴の実際的場面とも合致している[18]。祝宴は非日常的空間ではあるものの、そこでの人々の振る舞いは封建的権力構造を前提とした「理想的な」君主・騎士あるいは女性像が投影されている。そして、この場面から読み取れるのは、ジーフリトの宮廷貴族として、そして一国の王子としての資質である。詩人は、ジーフリトを、王子としての英才教育を受け、支配者たるに相応しい人物の典型として描いているが、ここには詩人独自の叙述戦略が働いていると言える。ジーフリトの素性は、北欧神話・伝説では神オーディンに由来し、竜退治によって不死身の身体を手に入れるという神話的・メルヘン的要素が付随した人物である。ただし、このようなジーフリトの人物像に関する「素材」は、12 世紀に由来するものではない。そこで詩人は、太古の英雄ジーフリトを中世的宮廷社会のエリートとして描き出すために、ジーフリトの神話・メルヘン的な要素を敢えて最初に紹介するのではなく、優れた王ジゲムントと王妃ジゲリントの息子として一人の騎士に列せられる様を描いている[19]。その上で、ジーフリトの竜退治および（北欧伝説とは異なる）ニーベルンゲンの財宝を入手するエピソードは、ジーフリトがヴォルムスに到着して初めてハゲネの口から語られる（Str. 84-101）。このハゲネの「報告」が「真実」であるという場合[20]、これは実際にジーフリトがこの世に存在し、そのようなことを為し得たか、という問いに対する保証ではなく、詩作内部の論理的展開を支えるための文学的装置として機能している。同様に、ジーフリトがプリュンヒルトの恐ろしき習慣について語り（第３節参照）、それが真実であるとグンテル達が信じるからこそ、（ハゲネの語ったように超人的な力を持つ）ジーフリトに援助を求めるのである。このような登場人物間の伝聞・報告という形式の内に、登場人物たちの一連の心理的展開への妥当性が保証されているのであり、このような語りの形式もまた、「真実性」を保証するためのトポスとも言える。すなわち、ジーフリトの神話的・メルヘン的素性に関するエピソードについて、ジーフリトの人生における時系列的な順序を入れ替えた上で、作中の伝聞形式を採っていることは、「素材の拘束力」を弱める働き、換言すれば古代の英雄ジーフリト像を当代風の宮廷人に装飾するための装置として機能していると言えよう。

さて、祝宴の場面に話を戻すと、ジーフリトの気質について詩人は以下のように語っている：

doch wolder wesen herre　　für allen den gewalt,
des in den landen vorhte　　der degen küen' únde balt.　　(Str. 43, 3f.)
（しかし）この勇敢で雄々しい勇士は、この国を脅かすかもしれない一切の勢力に対して支配者たろうと思った。

これは、ジーフリトが思い描く一国の主としての在り方「王者の不文律」を表出している。「支配者である（*herre wesen*）」こととは、敵対勢力を「力」によって屈服させることを意味しており、これは続く父王との会話、そしてヴォルムスに到着した際の挑発的な言動からも窺える。ジーフリトがクリエムヒルトに求婚する意思があることを父ジゲムントに伝えた際、父王はそれを喜ばしく思い、援助を惜しまないと伝える。このような父王の反応は、ジーフリトの個人的な意志を尊重しているだけでなく、彼女と婚姻関係を結ぶことが政治的にも自国にとって好ましいものであったからだと推測される。ジゲムントの支配者としての政治的配慮は、しかし、ジーフリトに求婚を思いとどまらせようする：

doch hât der künec Gunther　　vil manegen hôhférten man.

Ob ez ánder niemen wære　　wan Hagene der degen,
der kan mit übermüete　　der hôhverte pflegen,
daz ich des sêre fürhte,　　ez müg' uns werden leit,
ob wir werben wellen　　die vil hêrlîchen meit."　　(Str. 53, 4-54, 4)
「…しかしあのグンテル王はまこと多くの思い上がった家臣たち[21]を有している。〔そのひとり〕ハゲネという勇士以上に、傲慢を地で行くような輩がいるだろうか。それ故に私が恐れているのは、もし我々があのいとも素晴らしい乙女に求婚でもしようものなら、我々に苦悩が訪れるかもしれないことなのだ。」

この台詞に見られるように、父王は、ジーフリトの結婚が個人的事案の範疇に収まるものではなく、一国の政治的案件であると認識しており、強大な家臣が控えているブルグント勢と交渉することに懸念を示している。これに対して、ジーフリトは以下のように返答する：

"swaz ich friwentlîche　　niht ab in erbit,
daz mac sus erwerben　　mit ellen dâ mîn hant.
ich trouwe an in ertwingen　　beide líutę únde lant."　　(Str. 55, 2ff.)[22]
「もし彼らの許で友好的に事が進まないようならば、この手で勇敢に手に入れることもできましょう。きっと彼らの民も土地も征服できましょう。」

この発言に対して父王は、ジーフリトが思い止まらないのであれば、「ある限りの友をすぐさま呼び集める」(Str. 57, 4) と提言する。これに対してジーフリトは、軍勢を引き連れて結婚を迫るようなことはせず (Str. 58)、あくまで「ひとりの力で (*mîn eines hant*)」(Str. 59, 1) という意図を示していることから、彼にとって求婚の旅はあくまで個人的事柄の範疇に入るものと認識されていると言える。もちろん、王子である以上、自身の婚姻が政治的意味合いを帯びていることは間違いなく、その点を看過しているという意味では、ジーフリトの姿勢は、君主としての政治的感覚が欠如しているとも言えるかもしれない。先行研究においては、ジーフリトは無思慮かつ政治的能力の欠如した王子、武力によってすべてを決する古代的(アルカイックな)、猪突猛進型の英雄の典型であることがしばしば言及されている[23]。しかし、詩人によってジーフリトが中世的宮廷騎士の典型として構想されていることは明らかであり、その意味においてジーフリトの「王者の不文律」は宮廷的な特質を備えていると言える。さらに、ジーフリトにおいて求婚を個人的範疇、一国を賭けての戦いは政治的範疇、という区分が明確になされていることが、続くヴォルムス到着以降場面からより鮮明に窺うことができる。ジーフリトはまず、ヴォルムスへ赴いた理由を以下のように述べる：

Mir wart gesaget mære　　in mînes vater lant,
daz hie bî iu wæren　　(daz het ich ger' erkant)
die küenésten recken　　(des hân ich vil vernomen)
die ie künec gewunne;　　dar umbe bin ich her bekomen.　　(Str. 107)

…(2詩節略)…

Nu ir sît sô küene,　　als mir ist geseit,
sone rúoch ich, ist daz iemen　　líep óder leit:
ich wil an iu ertwingen,　　swaz ir muget hân:
lánt únde bürge,　　daz sol mir werden undertân.　　(Str. 110)

「父の国で私が聞き及んだ話によると、あなたが治めるこの地には、かつてどのような王も持ち得なかった武勇に秀でた勇士たちがいるとのこと。それを是非私みずから確かめたくこの地に参ったのです。(2詩節略)
私が聞き及んだようにあなたが勇敢であるならば、この挙が人々の喜びとなろうが悲しみとなろうが私は構いません。つまり私は、あなたが所有する一切のもの、土地も城も手に入れて、私のものとする所存なのです。」

ブルグントの面々は、ジーフリトのこの発言を「驚き」をもって聴き (Str. 111, 1)、反発と戸惑いを見せるが、ここで注目すべきは、ジーフリトのヴォルムス来訪の理由がクリエムヒルトへの求婚

ではなくなっていることである。彼は、一国を賭けての「力試し」、すなわち自らの王者としての資質を確認することに視線を転じている。王者としての資質とクリエムヒルトへ求婚するに足る資質、この両者が結びついているかどうか、この場面からは判断できないが、ゲールノートの仲裁があってはじめてジーフリトはクリエムヒルトのことを思い起こすようになる（Str. 123）。

そして、この場面で重要なのは、王者たる者としての在り方に対する「ジーフリトの論理」と「ブルグントの論理」[24]が異なっている点である。「ジーフリトの論理」に従えば、民草から王者として認められるには、自らの「名誉と首を賭ける」（Str. 109, 4[25]）覚悟が必要であり、この覚悟は実際的行為として他国を「征服する（*ertwingen*）」ことによって証明される。これは、勝者が領地と民を支配するに相応しく、王者の「勇敢さ（*ellen*）」によって領地の平和が保たれなければならないことを意味している（Str. 113, 2）。また、グンテルの「家臣（*küneges man*）」オルトウィーン・フォン・メッツがジーフリトの挑発に対して「私が先陣を切って戦いましょう」（Str. 117, 3）と発言した際、ジーフリトは王と家臣という身分の差を引き合いに出し、「おまえごとき〔家臣の分際〕が12人集まったところで私には勝てはしまい」と応戦する（Str. 118, 2ff.）。ここには「強き者＝位高き者」という不文律が働いており、後述する「プリュンヒルトの不文律」との一致が見られる。

一方「ブルグント側の論理」に従えば、これまで父の代から誉れ高く治めてきた国を「誰かの力によって（*von íemánnes kraft*）」失う謂われはなく、もしそのようなことが起ったとしたら、それは「騎士の道（*riterschaft*）に専心してきたことを無に帰するようなもの」である（Str. 112, 2ff.）。また、「我々〔ブルグント勢〕がどこか他の国を征服すること、それがために勇士の手によって誰かが命を落とすこと、このようなことは我々の望むところではない」（Str. 115, 1ff.）というゲールノートの言動から、ブルグント勢が、戦争（侵略）を前提とした領土拡張の意図を有していないこと、国の繁栄に関わる事柄に対しては、武力によるよりも政治的対話力による対処が優先されていることが窺える[26]。

以上のことからも、ジーフリトの王者としての自信と誇りの拠り所は、その身体的力量であって、交渉力・駆け引きなど知力に拠るものではないことは明らかだが、このことがジーフリトの政治的能力の欠如を示すものではない。少なくとも、ジーフリトの挑発的な言動に対して、詩人は客観的な（否定的・批判的な）判断を下していない。そして、続くザクセン戦争の場面における彼の「武勇」は、宮廷社会における誉れを高め、結果としてヴォルムスの宮廷内での（政治的）地位を向上させていることからも、「ジーフリトの論理」は十分に政治的効果を有していると言える。

2-2. ヴォルムス滞在の動機と友好関係の形成

続くザクセン戦争のエピソードでは、二人の王者ジーフリトとグンテルの間で、如何にして友好関係が形成されたのか、その過程を読み取ることができる。グンテルはリウデガスト・リウデゲールの連合軍に宣戦布告され、難しい政治的判断を迫られていたが、この案件についてはジーフリトには伏せられたままだった。その理由をグンテルは以下のように語っている：

"Jane mág ich allen liuten　　die swære niht gesagen,
die ich muoz tougenlîche　　in mîme herzen tragen.
man sol stæten vriwenden　　klagen herzen nôt."　　(Str. 155, 1ff.)

「私は、心の内に伏せておかねばならない難儀を誰かれ構わず喋ってよいわけではない。心からの苦悩は、誠実な友にこそ語るべきものなのだ。」

この時点でグンテルはジーフリトを「誠実なる友」とは見做していない。一方のジーフリトは心中穏やかではなく、表情は「青ざめたり紅潮したりした」(Str. 115, 4)。そして、彼に以下のように言わしめる：

"ich sol iu helfen wenden　　elliu iuwer leit.
welt ir vriwent suochen,　　der sol ích éiner sîn,
unt trouw ez wol volbringen　　mit êren an daz ende mîn."　　(Str. 156, 2ff.)

「私は、あなたのどんな苦しみも取り除いてみせましょう。もしあなたが友をお探しなら、私がそのひとりとなりましょう。そして名誉にかけて、この命尽きるまで友として努めあげましょう。」

ここでグンテルは、ジーフリトの「友情の念（*holt*）」(Str. 157, 3）を確認し、ザクセン・デンマーク連合の軍勢が迫っていることを告白する。すぐさまジーフリトは防衛の任を申し出て、この申し出に対してグンテルは「永久にそなたに（*dir*）助力をもって報いよう」(Str. 160, 4）と返答する。ここで注目すべきは、グンテルのジーフリトに対する「呼称」の変化である。直前の箇所（Str. 157, 4）でグンテルは「私が生きている限り、あなたに（*iuch*）報いる所存です」と敬称 *ir* によって語っているが、ジーフリトの申し出以降は親称 *du* へと変化している[27]。これはザクセン戦争を通じて、ジーフリトが賓客（*gast*）の立場から全幅の信頼を得た友（*vriwent*）へとその友好関係を深めたことを意味している[28]。

ところで、ジーフリトのヴォルムス滞在の動機がまだ見ぬクリエムヒルトにあることは、ジーフリトのクリエムヒルトに対する揺れる心理状況を吐露したモノローグ（Str. 136, 2ff.）[29] だけでなく、むしろそれ以上に詩人によっても説明されている（Str. 123, 4; 131, 1-134, 4）[30]。ただし、この時点では、グンテルの信頼を勝ち得ることとクリエムヒルトへの求婚が同一視されているわけではない。なぜならジーフリトは、参戦すること（あるいはその戦果）に対して何の物的対価も求めておらず、この場面では彼にとってグンテルとの友好を深めることが最重要課題であったに過ぎないからである。

かくしてジーフリトがその華々しい戦果によってグンテルやブルグントの民草の信頼を勝ち得たことはゲールノートの以下の言葉に表れている：

“der iu sînen dienest　　sô güetlîchen bôt,
Gúnther, vil líeber bruoder,　　dem sult ir tuon alsam
vor allen disen recken;　　des râtes ich nímmer mich gescam.

Ir heizet Sîvriden　　zuo mîner swester kumen,
daz in diu maget grüeze,　　des hab’ wir immer frummen.
diu nie gegruozte recken,　　diu sol in grüezen pflegen,
dâ mit wir haben gewunnen　　den vil zierlîchen degen.”　　(Str. 288, 2-289, 4)

「親愛なる兄上、グンテルよ、あなたに真心から仕えて下さったかの勇士に、我らの勇士たちの前で、同じく真心を示して下さい。この助言を私は恥じることはありません。妹君がジーフリトに挨拶をするため、彼をあの乙女の許へと行かせて下さい。それが我々にとってもためになりましょう。彼女はまだどんな勇士にも挨拶をしたことがありません。その彼女が彼に挨拶をすれば、我々はあの素晴らしい勇士を手中に収めたも同然でしょう。」

ゲールノートのこの進言は、宮廷社交における「挨拶」の作法とその「効果」を前提とした、非常に政治的意味合いの強いものである[31]。親族内の未婚の女性、しかもここでは王女であるクリエムヒルトに挨拶をさせること、このような行為は、宮廷貴族たちが友好関係を築くための一般的な政治的配慮・手段であったが、そもそもジーフリトはクリエムヒルトへの求婚の意志をブルグントの面々には語っておらず、彼らがジーフリトの思惑を利用したとは言い難い[32]。ジーフリトはこの計らいによってクリエムヒルトと対面するという念願が叶い（Str. 291ff.）、その際二人は相互の愛情を確認するが、戦勝を祝う祝宴後にジーフリトは暇乞いを申し出る。その時のジーフリトの心理状態を詩人は、「彼が求婚することができなかったのは、それだけの勇気がなかったからだ」と説明している（Str. 320, 2）。この時のジーフリトには、ザクセン戦争での戦果によってクリエムヒルトへの求婚を実現させようとする意思がなかった、あるいは求婚するに見合うだけの行為ではなかったと判断したと言えよう。

最終的にジーフリトはギーゼルヘルに慰留され、「親愛の情のために（*durch vriwende liebe*）」（Str. 323, 1）ヴォルムスに逗留し続けた。それによって「彼は日ごとあの美しいクリエムヒルトに見（まみ）えることが叶った」（Str. 323, 3f.）のではあるが、彼にとってクリエムヒルトはまだ憧れの存在に留まっていた。ジーフリトにとってクリエムヒルトとの結婚が現実的なものとなるには、より要求度の高い次なる段階を踏む必要があった。

3.「身分の偽称（Standeslüge）」

3-1. 援助に対する対価要求と誓約

ジーフリトの一年間のヴォルムス滞在は、クリエムヒルトへの求婚における必要条件を整える準備期間に相当する。その条件とは、クリエムヒルトの好意を得ること、彼女と個人的な関係を築くことであり、その意味においてはブルグント勢との（政治的）友好関係の形成は副次的産物であった。しかしこの友好関係は、クリエムヒルトへの求婚を実現するために大きな意味を持つようになる。ジーフリトの側に大きな変化をもたらしたのは、グンテルがイースラントの女王プリュンヒルトへの求婚の意志を表明したことによる。

求婚者に三種の競技を課し、挑戦者が一種目でも敗れた場合は命を奪うというプリュンヒルトの「実に恐ろしき習慣（*sô vreislîche sit*）」（Str. 330, 2; 340, 2）のことを知っていたジーフリトは、グンテルの身を案じ、この求婚の旅を思いとどまらせようと反対する（Str. 330）[33]。しかし、グンテルは自身の意を曲げず、ジーフリトに援助を申し出る際、その対価として「自身の名誉と命（*êre und lîp*）を懸けて〔ジーフリトのために〕尽力するつもりだ」と語る（Str. 332）。そこでジーフリトは、援助の対価としてクリエムヒルトとの結婚を要求する（Str. 333）。これは明らかにザクセン戦争の時とは状況が異なる。ジーフリトの側から見ると、ザクセン戦争の際は進んで援助を申し出たのに対して、この求婚の旅では、思い止まるように助言した上で助力を求められている。また、二人の間にはすでに対等な信頼関係が出来上がっていた。このような関係性においてジーフリトは援助の「見返り」を求めることができたのであって、その見返りとしてクリエムヒルトとの結婚を要求する。

ところで、ここでの見返りの要求も含め、ジーフリトにはいくつかの選択可能性があったと考えられる。この場面では、名誉を懸けて援助を求められた者は、自らも名誉を懸けて応じなければならないという一種の宮廷的規範の拘束力が働いていたとも考えられるが、それでもなおジーフリトはグンテルの要請を固辞することが可能であったと言えよう。なぜなら、プリュンヒルトをめぐる冒険は、最強の勇士といえども命の保証がない危険な旅になる公算が高いからである。しかし、ジーフリトは敢えてこの冒険に協力する。そして、「危険に見合うだけの対価」を要求する。ここでクリエムヒルトを所望するということは、ジーフリトにとってこの求婚の旅がザクセン戦争以上の危険を伴っていることを意味している。ただし、そのような危険と報酬を天秤にかける際、何らかの心理的葛藤が生じても不思議ではないが、それに関する心理描写は一切ない。むしろ詩人は、それに代わって「隠れ蓑（*tarnkappe*）」（Str. 336, 1）を登場させる（次節参照）。詩人はこの切り札の存在を、（後の冒険における実際の効果から明らかなように）ジーフリトがグンテルに協力するに至る動機の根拠に据えていると言える。

また、信頼と名誉を懸けた援助要請と受諾に際して、両者の間に「誓約（*eide*）」（Str. 335, 1）が立てられるが、この婚姻関係についての誓約は、諸侯を前にして交わされたものであり、公的な

拘束力を有するいわば国家間の政治的取り決めでもある[34]。ジーフリトは、グンテルの求婚の手助けをすることで、クリエムヒルトを娶るという「目的」のための「手段」を得た（選択した）のであるが、ここで問題となるのは、ジーフリトがこのタスクをどのように遂行したのかである。

3-2.「身分の偽称」の不可避性

ジーフリトは、グンテルの求婚の旅においてプリュンヒルトに謁見する際、以下のように提案する：

sô sult ir, helde mære,　　wan einer rede jehen:
Gunther sî mîn herre,　　und ich sî sîn man.　　(Str. 386, 2f.)[35]
評判高き勇士たちよ、あなたがたが語ることはひとつにして頂きたい。すなわち、グンテルは私の主人であり、私は彼の家臣である、と。

身分概念は当時の宮廷社会の秩序において「欠くことのできない道徳的な基盤」[36]であるにもかかわらず、本来（将来的に）一国の王たる人物が、身分的に他者に従属するといういわば屈辱的な振る舞い[37]を自ら引き受ける理由はどこに見出されるべきであろうか。ここで重要なのは「家臣（*man*）」についての中世身分概念上の定義[38]、あるいは見かけ上であるにせよ、一時的に従属関係を受け入れるジーフリトの心的態度ではない。確かに、「このような約束をするのは貴公〔グンテル〕への好意のためではなく、貴公の妹君、あの美しい乙女のためなのです」（Str. 388, 1f.）と本人は語っている。しかし、このようなジーフリトの心理は、クリエムヒルトとの奉仕関係（Str. 304 u. 374）における「自己放棄」[39]として理解されるものではない。彼が身分の偽称を選択したこととクリエムヒルトへの奉仕とは何の因果関係もない。また、この偽称は「他者の求婚を援助する場合には〔援助する側の〕社会的な従属が前提とされる」[40]という状況的な所与性ではない。むしろ、ジーフリトは、純粋にグンテルの求婚を成就させるために、３万の軍勢を引き連れていくというグンテル自身の提案に対して、「より良き提案をした（*baz bewîsen*）」（Str. 340, 4）に過ぎない[41]。なぜなら、この偽称の必要性は、欺かれる側であるプリュンヒルトの動機と関連しているからである：

Si sprach: "ist er dîn herre　　únt bistú sîn man,
diu spil, diu ich im teile,　　getar er diu bestân,　　(Str. 423, 1f.)
彼女〔プリュンヒルト〕は言った。「もしあの方〔グンテル〕がそなた〔ジーフリト〕の主人ならば、そしてそなたがあの方の家臣ならば、この競技はあの方と戦うのですね…」

プリュンヒルトのこの台詞から、彼女にとっての宮廷的身分概念には「身分」と「力強き者」が互

いに同調する「プリュンヒルトの不文律」が介在していることが窺える[42]。これは先に述べたジーフリトの「王者の不文律」と同様である。この事情をジーフリトはすでに知っていたことから、グンテルが対戦相手として「選ばれるため」、あるいは己の力に絶対の自信を誇っているプリュンヒルトの対面を汚さないためには、彼はグンテルと対等の立場で彼女の前に立つわけにはいかなかった[43]。それ故にジーフリトの偽称は、このような求婚される側の条件に即した要件であり、不可避のものであったと言える。

4.「隠れ蓑（*tarnkappe*）」モチーフとプリュンヒルト像

グンテルの求婚の旅に際して、ジーフリトは身分の偽称と並んで「驚くべき策略（*mit grôzen listen*）」（Str. 337, 4）のひとつとして「隠れ蓑」を携えて行かねばならなかった（Str. 336, 1）。この「隠れ蓑」は、北欧神話・伝説の系統には見られない、ニーベルンゲンの詩人独自の創作であり、詩人はその効用について３詩節を割いて説明している（Str. 336ff.）[44]。「隠れ蓑」をジーフリトが用いたことは、身分の偽称とは対照的に「見えざる嘘」であるが、ここでの *list* という語には肯定的な意味での「賢さ」と否定的意味での「狡猾さ」あるいは「権謀術数」という両義性が含まれており、文脈によって捉え方が変わるという解釈上の問題性を孕んでいる。例えば後述するように、両王妃の口論の場面（Str. 815-850）における「不埒な姦計（*ein arger list*）」（Str. 841, 1）といった表現では、形容詞によって否定的側面が強調されている。ここでの「策略」も、形容詞 *grôz* を皮肉的に解釈することで正反対の意味が生じる可能性を孕んでいる。ただし、ジーフリトの選択不可能性を考慮すれば、彼が為し得る最大の努力だったことは明らかであり、その意味においては隠れ蓑の存在とその使用は肯定的に捉えられるべきであろう。

そして、身分の偽称同様、隠れ蓑はプリュンヒルトの存在と大きな関わりを持っている。「プリュンヒルトの不文律」は、中世封建的原理に基づいているが、女性の身でありながらそれを可能にしているのは、彼女の「神話的・古代的な強さ」である。これは北欧の伝承系統における半神格ヴァルキューレに由来する[45]ものだが、ここでもニーベルンゲンの詩人は「素材」をそのまま用いるようなことはしていない。すなわち、彼女が課す三種の競技もまた、北欧の伝承には見られないものであり、彼女の力を如何なく発揮するために「ニーベルンゲンの詩人」が施した擬古的な創作[46]であると考えられ、ジーフリトは隠れ蓑を用いることによって初めて彼女と互角に渡り合うことが可能だったのである。

プリュンヒルトの力は、しかし、「危険な」力として認識されている。このことは、彼女が「驕り高ぶる心（*übermuot*）」（Str. 340, 3; 446, 4）を持ち、「不遜（*hôhverte*）」（Str. 474, 2）で「悪魔のような女性（*des tíuvéles wîp*）」（Str. 438, 4）[47]として描かれていること、そして「よもや女性に負けるとはなんたることか」（Str. 443, 3f.）というダンクワルトの台詞[48]や、初夜の場面でのジーフリトの以下の懸念から窺える：

“Owe”, dâht’ der recke,　“sol ich nu mînen lîp
von einer magt verliesen,　sô mugen elliu wîp
her nâch immer mêre　tragen gelpfen muot
gegen ir manne,　diu ez sus nímmér getuot.”　(Str. 673)

「何たることだ」、勇士は思った、「もし今私がこの乙女によって命を失うようなことがあれば、すべての婦人たちが今以上に彼女の夫に対して驕った考えを持つやもしれん、そのようなことを彼女たちはこれまで思いもしなかったものだ。」

このような描写は、キリスト教的な女性蔑視の観点とも一致する[49]。その意味において彼女は、異教的・デモーニッシュな存在としてではなく、まさしく宮廷的道徳観の範疇で否定的評価がなされている女性君主である。すなわち、ジーフリトとプリュンヒルトの対決は一見すると異教なるもの同士の対決ではあるが、詩人はそこにキリスト教女性蔑視の観念および男性的・家父長制秩序観念と、婦人奉仕の理念を滑り込ませることによって、否定的な人物像をプリュンヒルトに付与している一方、ジーフリトの身分の偽称と隠れ蓑による虚偽行為は、「巧みな策略」という騎士的冒険（*âventiure*）として容認される素地を形成していると言える。まさしくこの意味において「隠れ蓑」は、「素材」に内在する異教的な特質の拘束性を、当時のキリスト教的道徳観に対応させた〈詩的捏造〉の産物なのである[50]。

5. 秘密の暴露と偽証

しかし、プリュンヒルトの征服は、後に「欺瞞」へと転落していく。この転落の原因は、プリュンヒルトから指輪と帯紐を抜き取り（Str. 679f.）、それを後に妻クリエムヒルトへ贈ってしまったことにある（Str. 684）。これに関しては、詩人をしても「彼がそのようなことをしたのは高ぶった感情（*hôhen muot*）故なのか、私にはわからない」（Str. 680, 2）と語るに留まっている[51]。このような詩人の留保は、ジーフリトの行為には何らかの倫理的問題性が内在していることを受容者に惹起している。なぜなら、この隠れ蓑の「見えざる真実」は、少なくともグンテル陣営からは暴露できない事柄だったからである[52]。

そしてここで重要なのは、プリュンヒルトとクリエムヒルトの口論の際に発したクリエムヒルトの台詞である：

du hâst geschendet selbe　den dînen schœnen lîp:
wie möhte mannes kebse　werden immer küniges wîp?”　(Str. 839, 3f.)

「…あなたはご自分でその美しいからだを辱かしめたのですよ。妾の女性が王の妻になれた例がありまして？」

… *“den dînen schœnen lîp*
den minnet' êrste Sîfrit,　　der mîn vil lieber man.
jane wás ez niht mîn bruoder,　　der dir den magetuom an gewan.

War kômen dîne sinne?　　ez was ein arger list.
zwiu lieze du in minnen,　　sît er dîn eigen ist?　　(Str. 840, 2-841, 2)

「…あなたの美しいからだを最初に愛したのはジーフリト、私の愛する夫なのです。そう、私の兄上ではないのですよ、あなたの処女を勝ち得たのは。あなたの分別はどこへ行ったのです？あれは不埒な姦計だったのです。彼があなたの臣下だというのなら、なぜあなたは彼の愛を受け入れたのです？」

この台詞の内容が、ジーフリトが語ったものと一致するならば、ジーフリトは事実を「歪曲」して妻に告げたことになる。ジーフリトが事実を歪曲して妻へ語ったかどうかは、作品の記述からは確定できないが、秘密を自ら「暴露」してしまったことは間違いないだろう。初夜の真実に関して、「不埒な姦計」というクリエムヒルトの見解は、確かに「怒りにまかせて」(Str. 839, 1) という感情的な部分も多分にあるが、欺いた側、ここではグンテルに対する批判的な見解でもある。つまり、自身の力では達成できなかったプリュンヒルトの征服を「巧みな策略」によって実現したのはジーフリトであって、ジーフリトに頼らざるを得なかったグンテルおよびそのことに気付けなかったプリュンヒルト自身にも落ち度があるという論調である。

この真実を突き付けられたプリュンヒルトは、真相を究明しようとする。その上でプリュンヒルトは、(彼女にとって) ありもしないことを「自慢した」ジーフリトに怒りの捌け口を向けるのである：

… *“mich muoz Kriemhilt　　mêre hœren lân,*
des mich sô lûte zîhet　　daz wortræze wîp.
hât er sichs gerüemet,　　ez gêt an Sîfrides lîp.”　　(Str. 845, 2ff.)

「クリエムヒルトにもっとよく聞き質さねば、あの女が皆の前で私に浴びせた酷いことばのことを。もしジークフリートがそれを自慢したのならば、彼の命にかかわることだ。」

プリュンヒルトから事の次第を伝えられたグンテルは、宮廷内での紛争解決の作法に則ってジーフリトを告発する。そこでは、ジーフリトの「発言の真偽」が問われ、ジーフリトはそのような発言、すなわちプリュンヒルトのからだを最初に愛したと「自慢した (*gerüemet*)」(Str. 857, 3) ことはないと誓いを立てる。この事実に反する「偽証」をグンテルは受け入れざるを得ないが、これは明らかな欺瞞である。「素晴らしき騎士たちは、互いにただ顔を見合わせるしかなかった」(Str. 861,

4）という、おそらく皮肉が込められた詩人の言はまさに、それが欺瞞であることを物語っている。さらにこの時、その罪（の一部）が女性たちに帰せられてしまっているが[53]、これはむしろ「責任転嫁」のイメージにより、彼らの偽証と偽誓の欺瞞的な意味合いをより強めているとも考えられる。いずれにせよこの偽証によって、自慢話をしていないことについてはジーフリトの「潔癖」が形式上証明される（Str. 860, 2f.）。

ここでの偽証は、身分についての虚言（偽称）とは明らかに意味合いが違う。なぜなら、嘘をつかねばならない前提（状況）が根本的に異なるからである。ジーフリトが妻に真実を語らねばならない理由はない。彼の行為は自慢話にあたり、そこに事実と異なる内容が含まれていれば「ほら吹き」となる。このような虚偽行為は、宮廷的道徳において強烈に非難されるべき行為であり、このことは宮廷叙事詩や抒情詩において、とりわけ教訓的文学作品の中でも言及されている[54]。それ故に、女主人の名誉を傷つけられたことに対してハゲネが激高し、ジーフリト暗殺を企てるのは無理からぬことである。ただし、先述のように詩人は、秘密を暴露する契機となったジーフリトの行為に対して「わからない」と判断を保留していたのとは対照的に、グンテルに対しては「ジーフリトがそのように彼〔グンテル〕に仕えたことを、彼はしかし後にまったく忘却してしまったのである」（Str. 397, 4）という批判的立場をとっている[55]。このことを鑑みれば、詩人がジーフリトを完全に擁護しているとは言えないまでも、「暴露」に関しては「過失」程度のものと認定していると言えよう。このことは、ジーフリト暗殺の場面で詩人が、ジーフリトに対して悲劇的な描写をしている一方で、ハゲネらを「不実の」殺害者と見做し、後にその「報い」をうけて当然とも語っていることからも窺える。

結び

以上のように、ジーフリトの偽称は、「プリュンヒルトの不文律」故に、たとえ結婚以降の展開、すなわちプリュンヒルトがグンテルとジーフリトの「見かけ上の」主従関係に固執し（Str. 618ff.; 724ff.）、必然的にその「真偽」を確かめようとする[56]場面へと展開していくものであったとしても、クリエムヒルトを娶るという目的のためには必要不可欠のものであった。そして詩人は、隠れ蓑という文学的素材を登場させ、ジーフリトがこの道具を目的遂行のために騎士的冒険という枠内で用いる様を肯定的に描き出している。しかし、両王妃の口論を経た後の偽証については、詩人は態度を保留しながらも、欺瞞的行為であることを窺わせる叙述となっている。

ところで、虚言に対する中世の人々の心的距離感は、教父アウグスティヌスに由来する「本質的に虚言は悪である」というキリスト教的概念[57]を前提としている。また、ジーフリトの虚偽行為にはトマス・アクィナスの虚言論との類似性が見出されもするが[58]、ここで注目すべきは、ニーベルンゲンの詩人がいずれの虚偽行為についても明確には善悪の判断を下していないことである。では、J. Le Goff が言うように、そのような倫理的判断自体が不必要なほど「中世は虚言をもはや嫌

悪していない」[59]のだろうか。H-W. Goetz によれば、中世の法制史および歴史記述の文脈においては、「事実、虚言、欺瞞、策略そして偽証が（もちろん非難された）政治の手段であったことは歴史記述の至る所において見て取れる」とした上で、虚言に関する神学的イメージは部分的にのみ適用され、むしろ個々の実践に置き換えられることによって、一種の教訓として独自のアクセントを持つに至ったとしている[60]。このことはまさしく文学作品、特に叙事文学にもあてはまるであろう。事実、ジーフリトの虚言は、一種の実践の型を示している。そこでは嘘をつく側の状況からだけではなく、欺かれる側のプリュンヒルトが幾分否定的に描かれることによって、虚偽行為自体の肯定性・妥当性をかなりの程度許容するものとなっていると言えよう。この意味においては、ニーベルンゲンの詩人の虚言に対する姿勢は、神学者のそれよりも[61]、歴史家や法制史家たちに近いものがあると言えるかもしれない。その上で、ジーフリトの虚偽行為を途述するに際して詩人は、登場人物の脱神話化を図ると同時に、独自のメルヘン的な脚色を施してはいるものの、作品の受容者が登場人物の行為の妥当性を中世当時の宮廷的倫理観の内で判断できるようにしていると言えよう。

注

1 本文中および註に引用したテクストは以下の版を利用した：Das Nibelungenlied. Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse. Stuttgart（Philipp Reclam jun.）2006. 写本Cのテクスト：Ursula Hennig: Das Nibelungenlied. Nach der Handschrift C. Tübingen（Max Niemeyer）1977. また、引用中の傍線は筆者による。

2 邦訳は以下の版を用いた：プルタルコス（瀬口昌久訳）：モラリア１（京都大学学術出版会）2008、51 頁。これはプラトンの文芸批評に対応するものであるが、本稿ではこの問題には立ち入らないこととする。

3 同上、88 頁。

4 「詩人が狙うのは、役に立つか、よろこばせるか、あるいは人生のたのしみにもなれば益にもなるものを語るか、のいずれかである」（*De arte poetica*, 333-34）［邦訳：松本仁助・岡道男訳：アリストテレース『詩学』、ホラーティウス『詩論』（岩波文庫）1997、249 頁］。

5 『語源（*Etymologiae*）』I, 41［歴史について］；I, 44［歴史の種類について］；VIII, 7［詩人について］；XIX, 16［絵画について］参照（The Etymologies of Isidore of Seville. Translated by Stephen A. Barney［et al.］; with the collaboration of Muriel Hall. New York（Cambridge University Press）2006）。イシドールスは特に詩文学の役目を以下のように述べている：文飾をともなった間接的な表象を用いて、実際に起こった出来事を変容することである（『語源』VIII, 7, 10）。

6 Xenja von Ertzdorff: Die Wahrheit der höfischen Romane des Mittelalters. In: ZfdPh 86（1967）, S. 375-389, hier S. 383.

7 例えば、ハインリヒ・フォン・フェルデケは、『エネアス物語（*Eneasroman / Eneide*）』（1180 年代半頃）の典拠がウェルギリウスの詩作であること、そしてアングロ・ノルマン語による翻案『ロマン・デネアス（*Roman d'Eneas*）』（1160 年頃）を基に詩作した経緯をエピローグで語っている。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは『トリスタン（*Tristan*）』（1210 年頃）序文でトマの作品を手本にしていること（V. 131-152）、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハも同様に、自らの言（詩作）が「真実」であることを明言している（『パルチファール（*Parzival*）』4, 8ff. 776, 8ff.）。また、ルドルフ・フォン・エムスは『アレキサンダー大王の歌（*Alexanderlied*）』（1240 年頃）を執筆する際に、あらゆる典拠を精査したと述べている（第

四巻冒頭：V. 13051ff.)。

[8] アウグスティヌス（宮谷宣史訳）：告白録（上）（アウグスティヌス著作集５／Ⅰ）（教文館）1993-2007、59-67頁（第１巻13・14章）参照。

[9] Xenja von Ertzdorff: a. a. O., hier S. 384.

[10] すなわち、歴史上の東ゴート王テオドリクス（456-526年）をモデルとしたベルンの騎士ディエトリヒは詩作後半部において登場し、彼はフン族の王エッツェル（アッティラ）の宮廷に食客として滞在している。しかし、歴史上のテオドリクスはアッティラの死後（453年没）に生まれている。『皇帝年代記』のテクストは以下を利用：Deutsche Chroniken und andere Geschichtsbücher des Mittelalters. Hrsg. von der Gesellschaft für Ältere Deutsche Geschichtskunde. 6. Bde. Dublin（Weidmann）1968-1980.

[11] Ulrich Ernst: Lüge, *integumentum* und Fiktion in der antiken und mittelalterlichen Dichtungstheorie: Umrisse einer Poetik des Mendakischen. In: Das Mittelalter 9（2004）, S. 73-100, hier S. 88.

[12] Xenja von Ertzdorff: a. a. O., hier S. 384f.

[13] Thomasin von Zerklaere: Der Welsche Gast. Ausgewählt, eingeleitet, übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Eva Willms. Berlin / New York（Walter de Gruyter）2004, S. 43f.

[14] 北欧に伝わるニーベルンゲン伝説は主に『エッダ』、『ヴォルズンガ・サガ』および『ティドレクス・サガ』から窺うことができる。

[15] Vgl. Peter Göhler: Das Nibelungenlied. Erzählweise, Weltanschauung, literaturgeschichtliches Umfeld. Berlin（Akademie-Verlag）1989, S. 19.

[16] Herman Schneider: Einleitung zu einer Darstellung der Heldensage. In: PBB 77（1955）, S. 71-82, hier S. 81.

[17] Xenja von Ertzdorff: a. a. O., S. 387.

[18] 例えば1184年マインツの祝典の盛大さについて複数の年代記が伝えている。Vgl. Joachim Bumke: Höfische Kultur. Literatur und gesellschaft im hohen Mittelalter. München（dtv）2005[11], S. 276-281. また、ゴットフリートの『トリスタン』では、一章分（第８章）を割いてトリスタンの刀例の場面が、「往時の称賛（*Laudatio temporis acti*）」のトポスを伴って描かれている（V. 4547-5068）。

[19] 『ヴォルズンガ・サガ』では、シグルズ（ジーフリト）はシグムント（ジゲムント）とヒョルディースの間の子とされる。また、シグムントとシグニュー（ジゲリント）は双生児であり、近親相姦によって息子シンフィヨトリを設けている。

[20] ハゲネに対してグンテルは「ありのままの真実（*rechte[n] wârheite*）を語ってはくれまいか」（Str. 83, 4）と依頼し、「お主の語ったことはまったく真実（*wol wâr haben*）だろう」（Str. 102, 1）と納得する。

[21] *hôhférte[n] / hôhverte, mit übermüete* のいずれもの語も「気高い・誇り高き」という肯定的意味だけでなく「思い上がった・傲慢な」という否定的意味も有しており、文脈によってどちらの語義を採用するか、解釈者の判断に委ねられている。とりわけ *übermüete* は、ハゲネの人物像に対する評価と密接に結びついており、肯定的英雄像と裏切り者・謀略者という否定的人物像の二面性を解釈する際に大きな意味を持っているが、本稿では人物像解釈におけるこの語の重要性と多義性についてはこれ以上立ち入らないこととする。

[22] 同様のことは母ジゲリントの許に参内した際にも語られる：*jâ wil ich âne sorge　　vor allen wîganden sîn*（Str. 61, 4）

[23] Vgl. Otfried Ehrismann: Sifrids Ankunft in Worms. Zur Bedeutung der 3. Aventiure des Nibelungenliedes. In: Festschrift für Karl Bischoff zum 70. Geburtstag. Hrsg. von Günter Bellmann, Günter Eifler und Wolfgang Kleiber. Köln（Böhlau Verlag）1975, S. 328-356, bes. S. 343ff., 349, 352 u. 354; Karl Heinz Ihlenburg: Das Nibelungenlied. Problem und Gehalt. Berlin（Akademie Verlag）1969, S. 54; Bert Nagel: Widersprüche im Nibelungenlied. In: Nibelungenlied und Kudrun. Hrsg. von Heinz Rupp. Darmstadt（Wissenschaftliche Buchgesellschaft）1976, S. 367-431, bes. S. 393. また G. Weber は、中世的・「騎士（道）的な楽観主義」に対して古代ゲンルマン的な「英雄性（Reckentum）」を対置させ、この英雄性が物語の原動力となっていると

解釈している（Gottfried Weber: Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963, S. 3 u. 185.）。

[24] これは「ジゲムントの論理」とも一致するであろう。

[25]「首を賭ける」とは「命を賭ける」ことと同義だが、ここでは（国家的・私闘に関わらず）戦いにおいて「敗れる」ことが「死」を意味している（Vgl. Str. 115, 2）だけでなく、「人質」として身柄を担保に取られることも含まれる。

[26] Vgl. auch Str. 124, 1ff.: *"Wie zæme uns mit iu strîten?"　sprach aber Gêrnôt. / "swaz helde nu dar unter müese ligen tôt, / wir hetens lützel êre　und ir vil kleinen frum."*

[27] この時点ではまだジーフリトはグンテルに対して親称 *ir* で呼びかけている。

[28] Vgl. Jan-Dirk Müller: Motivationsstrukturen und personale Identität im „Nibelungenlied". Zur Gattungsdiskussion um „Epos" oder „Roman". In: Nibelungenlied und Klage. Sage und Geschichte, Struktur und Gattung. Passauer Nibelungengespräche 1985. Hrsg. von Fritz Peter Knapp. Heidelberg（Carl Winter）1987, S. 221-256, bes. S. 233.

[29] ザクセン戦争後のものとしては以下の箇所が挙げられる：Str. 285, 1ff.

[30] ザクセン戦争後のもの：Str. 258, 4; 260, 1f.

[31] Vgl. Joachim Bumke: a. a. O., S. 299ff.

[32] 詩人は、グンテルのみ、ジーフリトの恋慕の情を見抜いていたとしている（Str. 272）。そのためにグンテルは、オルトウィーンの進言（Str. 273f.）を受入れたのではあるが、オルトウィーンの進言も戦争祝賀の来賓たちを喜ばすためのものであり、ジーフリトのクリエムヒルトに対する好意をグンテル自身がイニシアティヴをとって政治利用しようとしていたわけではない。

[33] 写本C系統では、この直後にグンテルとジーフリトの対話（Hs. C: Str. 334 u. 335）が追加されており、そこでジーフリトは、プリュンヒルトの身体的能力の卓越性、グンテルの勝利の不可能性を説いている。

[34] この誓いの立て方は「手を取って」なされたが（Str. 334, 1, vgl. auch Str. 374, 4）、当時ドイツは、フランスやイタリアに比べ、国家統治に必要不可欠な宮廷会議の「記録」や「証書」の類の作成にはほとんど無頓着であったことはよく知られている（服部良久：フリードリヒ１世・バルバロッサの宮廷とコミュニケーション：儀礼・争い・秩序［京都大学『京都大学文学部研究紀要』第 50 号（2011）、201-249 頁］、210 頁以下参照）。

[35] 写本 C では；*Gunther sî mîn herre, ich sî sîn eigen man*（Hs. C: Str. 395, 3）となっている。

[36] Bert Nagel: a. a. O., S. 414f.

[37] 例えば、ジーフリトがグンテルの馬の鐙を引いてイースラントの岸に上陸した場面について、詩人は、「彼はそのような奉仕（*dienest*）をこれまで一度たりともしたことがなかった」（Str. 398, 2）と語っている（Vgl. auch Str. 259; 556）。また、ブルグントとニーデルラントの「国力」の優劣を作品の記述から導き出すことはほとんど不可能であり、潜在的な国力の差が、ここでの従属関係の前提となっているわけではない（Vgl. Peter Göhler: a. a. O., bes. S. 81f.; Jan-Dirk Müller: SIVRIT: *künec – man – eigenholt*. Zur sozialen Problematik des Nibelungenliedes. In: ABäG 7（1974）, S. 85-124, bes. S. 94）。

[38] J.-D. Müller は、登場人物たちの行動規範に関わる社会学的な枠組みとして機能していたのは、家士制（Vasallität）ではなく家人制（Ministerialität）であると見做している（Jan-Dirk Müller: ebd., S. 105-109）。また、U. Schulze は、イースラント上陸の場面解釈に際して（上記註参照）ジーフリトを「主馬頭（元帥）」と見做している。加えてプリュンヒルトがジーフリトを「臣下の者（*eigenholden*）」と言及したこと（Str. 620, 2-4）に着目しており、中高ドイツ語の *eigenholt* は本来「農奴の身分」に相当するが、宮廷社会における文脈では「家来」、「下僕」、「召使」といった比較的広範な階層を示す可能性があったことを指摘し、ジーフリトとグンテルの従属関係の明確化を図っている（Ursula Schulze: *Gunther sî mîn herre, und ich sî sîn man*. Bedeutung und Deutung der Standeslüge und die Interpretierbarkeit des 'Nibelungenliedes'. In: ZfdA 126（1997）, S. 32-52, hier S. 37f.; 42-51）。

[39] Peter Göhler: a. a. O., bes. S. 86ff.; Jens Haustein: Siegfrieds Schuld. In: ZfdA 122（1993）, S. 373-387, bes. S.

381.

[40] Jan-Dirk Müller: a. a. O. [s. Anm. 37], hier S. 113.

[41] ジーフリトは、求婚の冒険を成し得るには、選抜きの4人が「勇士の慣わしに従って（*in recken wîse*）」（Str. 341, 1f.）イースラントへ渡ることの方が都合がよいと提案している。

[42] Jan-Dirk Müller: a. a. O. [s. Anm. 37], hier S. 106.

[43] Vgl. Ebd.

[44] ひとたび被ると12人力を得られ、被った者の姿を隠す力を有している。また、隠れ蓑の初出はハゲネの報告内（Str. 97）であるが、そこでは効用については語られていない。

[45] U. Schulze は、女性美と超人的な（男性的）膂力を併せ持っているブリュンヒルトを「性別の不確かな存在（ein androgynes Wesen）」と見做している（Ursula Schulze: a. a. O., S. 35）。

[46] Otfrid Ehrismann: Nibelungenlied. Epoche-Werk-Wirkung. München（Beck）1987, S. 127.『ヴォルスンガ・サガ』では、シグルズがグンナルに姿を変えて、ブリュンヒルドを取り囲む炎を飛び越えることによって、求婚のタスクが達成される。

[47] および Str. 442; 450 参照。

[48] 競技に勝利した後のジーフリトの台詞も参照：「喜ばしいことだ（中略）そなたの驕りがここに治まり、そなたの主人となられるお方が生きておられることは」（Str. 474, 1ff.）。

[49] E. Lienert は、プリュンヒルトを、男性によって乗り越えられる存在として、詩人によってつくられた「男性的な空想物」と見做している（Elisabeth Lienert: Perspektiven der Deutung des *Nibelungenliedes*. In: Die Nibelungen. Sage-Epos-Mythos. Hrsg. von Joachim Heinzle, Klaus Klein und Ute Obhof. Wiesbaden（Reichert）2003, S. 91-112, hier S. 107）。

[50] そして、イースラントでプリュンヒルトに勝利した後、帰国の途に就くに先立って、ニーベルンゲンの勇士たちをいわゆる「保険」として召集するためにニーベルンゲンの国に赴く逸話が語られている（Str. 477-481）。その際、城門を守っている巨人に対して、力試しをしようという意図で身分を隠し（声色を変え）武者修行の体で一戦をしかける（Str. 478, 4）。これもまた「偽称」にあたるが、身分を隠す理由がまったくない。続け様に、名前を明かさないまま宝物庫の番人である狂暴な侏儒アルプリヒをも組み伏せるが、その際「彼は礼儀作法に従い、それ故に彼は誉れを授かった」（Str. 496, 4）と描かれている。この場面もまたジーフリトの丈夫ぶりを示す英雄譚には違いないが、それと同時に彼の宮廷騎士としての見事さを物語っていると言える。

[51] 写本Cでは、「天上の神も、それを思いとどまることを願ったであろう」（C: Str. 689）となっている。また、*hoher muot* は、先の *list* 同様、「高ぶる心」あるいは「驕った気持ち」という肯定・否定両方の意味で用いられる表現である。先行研究においても基本的に肯定・否定の二者択一の解釈に拠っているが、むしろ、ここで重要なのは、二者択一性ではなく、ジーフリトのこの行為に対して「説明がつかない」ことである。

[52] 結婚後、プリュンヒルトがジーフリトの身分について執拗に問い質しても、グンテルはジーフリトの王としての「独立性」を強調して、秘密を保持している（Vgl. Str. 618-624; 724-728）。

[53]「我々は婦人たちに教えねばなりませんな……傲慢なことを語らぬよう慎むべきであることを。……妻の礼儀に反した振る舞いを私は実に恥ずかしく思っております」（Str. 862）：「ご婦人たちは、実に些細なことで怒りだすものですから」（Str. 866, 4）

[54] 中高ドイツ語による教訓詩の文学史の文脈において、トマジンの『異邦の客人』では「虚飾・虚栄心（*vana gloria*）」（V. 217-296）について、フライダンク（Freidank）の『理性について（*Bescheidenheit*）』（1230年頃）における「嘘偽りについて」（165, 21-172, 9）の章とフーゴ・フォン・トリムベルク（Hugo von Trimberk）の『駿馬（*Der Renner*）』（14世紀初頭）にも虚言についての言及が見られ（V. 15063-15568）、これらの作品では特に「欺瞞的な」嘘に焦点が当てられている（Vgl. Ulrich Ernst: Homo mendax. Lüge als kulturelles Phänomen im Mittelalter. Einleitung. In: Das Mittelalter 9（2004）, S. 3-11, hier S. 6）。ただし、この三作者は

みなキリスト教会関係者、あるいは教会・修道院学校で神学教育を施されたであろう人物たちであり、虚言のような倫理学的主題は、主に聖職者あるいはそれに近い人々たちの関心事であったことが窺える。

[55] さらに詩人は、ジーフリトの暗殺計画を黙認し、阻止しようともしないグンテルの政治的イニシアティヴの欠如、すなわち王者として、宮廷騎士としての無能さを批判している（Vgl. Karl Heinz Ihlenburg: Das Nibelungenlied. Problem und Gehalt. Berlin（Akademie-Verlag）1969, S. 52ff.）。

[56] K. H. Ihlenburg は、ブリュンヒルトはすでにジークフリートが家臣として偽って名乗ったことを見抜いていると論じている。その上で、ブリュンヒルトのこの招待の目的は、その虚偽の事実の裏づけを取るためであるとしている（Vgl. Karl Heinz Ihlenburg: a. a. O., S.64ff.）。

[57]『虚言論（*De mendacio*）』4-6; 9; 41（Migne, Patlogia Latina［PL］40［*De Mendacio*］, Sp. 487-518）。

[58] トマス・アクィナスは、滑稽な虚言、（危険を回避するためなどの）善意に基づく虚言、相手に損害を与えることを意図する虚言の三つの区分のうち、前二者の罪は軽く、第三の嘘は重罪としている（『神学大全（*Summa theologiae*）』II-2, 110［真実と対立的な諸々の悪徳について］; 111［偽装と偽善について］を参照（トマス・アクィナス（稲垣良典訳）：『神学大全』第 20 巻 Secunda Secundae. QQ. 101-122（創文社）1994、145-184 頁）。また、トマス・アクィナスが参照したアリストテレスの『ニコマコス倫理学』では、真実と偽りを結ぶ線上の中間にある性格は真実を愛する性格、すなわち偽りを避けようとする性格であり、その中間を挟んでその両端には偽りを好む性格が置かれている。一方は「誇張」であり、もう一方は「謙り（へりくだ）」であるが、アリストテレスは「誇張」をより劣悪であるとしている（アリストテレス（加藤信朗訳）：ニコマコス倫理学（アリストテレス全集 13）（岩波書店）1973、135-138 頁（第 4 巻第 7 章［真実について］）参照）。ジーフリトの身分の偽称は、家臣への下降、婦人奉仕という要素がアリストテレスに従えば、方向性としては「謙り」に傾いている。そして宮廷的規範に則って、友情の尊重と誓約の履行という観点から見れば、まさに中庸を歩んでいると言えよう。その一方で、暴露されてはならない秘密を自慢話としての「吹聴」するというジーフリトの行為は、「誇張」にあたる。

[59] Jacques Le Goff: Kultur des europäischen Mittelalters. Zürich 1964, S. 592 u. 784.

[60] Hans-Werner Goetz: Konzept, Bewertung und Funktion der Lüge in Theologie, Recht und Geschichtsschreibung des frühen und hohen Mittelalters. In: Das Mittelalter 9（2004）, S. 54-72, hier S. 61f., Zitat aus S. 70.

[61] 確定的な態度をとってはいないものの、多くの研究者が「ニーベルンゲンの詩人」がおそらく聖職者であろうと見做している：Hilde E. Hansen:"Das ist Hartnäckigkeit in einer verwerflichen Sache; sie selbst nennen es Treue". Literatursoziologische Untersuchungen zum Nibelungenlied. Frankfurt am Main（Peter Lang）1990, S. 72 u. 164; Stephen C. Jaeger: The Nibelungen Poet and the Clerical Rebellion against Courtesy. In: Spectrum medii aevi. Essays in early German Literatur in honor of George Fenwick Jones. Ed. by William C. McDonald. Göppingen（Kümmerle）1983, bes. S. 177-206; Ursula Schulze: Nibelungen und Kudrun. In: Epische Stoff des Mittelalters. Hrsg. von Volker Mertens und Ulrich Müller. Stuttgart（Kröner）1984, S. 111-140, bes. 112.